# 19 世紀末ケープ植民地と
# ヨーロッパ・アイデンティティ

堀内　隆行

## はじめに

2003 年 9 月、雑誌『南部アフリカ研究』29 巻 3 号は、特集「空間、場所、アイデンティティ―南部アフリカの歴史地理学―」（‘Space, Place and Identity: Historical Geographies of Southern Africa’）を掲載した。同特集の序論は、歴史地理学の研究史を振り返りつつ、ポストアパルトヘイトの今日、南アフリカ史研究が抱える問題の所在を指し示す。1970 年代末に登場したラディカル派は、二つの側面で西洋世界との連関を追求した。つまり、I・ウォーラーステイン、E・P・トムスン等欧米の研究動向の影響下にある一方、南部アフリカ社会を規定する人種差別の起源をイギリス帝国主義、資本主義に求め、研究内容上も欧米の影響を強調した。しかし、ポストコロニアルの立場に立つ近年の研究は、ラディカル派が追求した西洋世界との連関を絶つことを主張する。こうした研究は、理論的基礎をインド起源のサバルタン・スタディーズに求め、あるいはオーラル・ヒストリーを利用し、研究内容上も「西洋中心主義的歴史叙述」を排除しようとする[1)]。

イギリス帝国史研究も同様の状況にある。例えば 2003 年 5 月、雑誌『帝国・コモンウェルス史』31 巻 2 号は、特集「ブリティッシュ・ワールド―ディアスポラ、文化、アイデンティティ―」（‘The British World: Diaspora, Culture and Identity’）を掲載した。同特集の序論は、旧植民地のナショナル・ヒストリーの隆盛が帝国史という、イギリスと植民地の関係史の枠組自体を揺るがせていることを指摘する[2)]。以上二つの雑誌特集は、南アフリカ史、イギリス帝国史双方の研究について、ヨーロッパ・アイデンティティを語ることが容易くない現状を示

す。

しかし、研究動向上も研究内容上も西洋世界との連関を絶つのは、逆の極端でしかない。植民地支配、あるいはアパルトヘイトという負の遺産の克服が、連関の歴史的把握によりはじめて実現することもまた事実である。先述の特集「ブリティッシュ・ワールド」は、こうした現状を打開する試みの一つといえる。19 世紀末－ 20 世紀前半のイギリス領植民地において、ナショナル、あるいはエスニック・アイデンティティの形成が、帝国（「ブリティッシュ・ワールド」）の問題と不可分の関係にあったことを解明する。そのことによって、植民地のアイデンティティを理解する上で帝国の理解が不可欠であり、また逆に、帝国を理解する上で植民地のアイデンティティの理解が不可欠であることを強調する。

この「ブリティッシュ・ワールド」に対する関心は、南アフリカ史の研究動向の一部とも連動している。研究の焦点の一つは、19 世紀末ケープ植民地にある。鉱産資源の発見、二次の南アフリカ戦争が相次いだ当時、ここでは他地域に先行して、アフリカーナ（オランダ系入植者が自称。ボーア人）、アフリカ人、カラードのエスニック・アイデンティティの形成がはじまる。こうした過程は、帝国支配の下に、あるいはイギリス系入植者の世界にアフリカーナを文化的に統合することと対を成していた。この問題について従来は、白人間の対立を重視する傾向が強く、関心が低かった。だが近年は、Ｖ・ビックフォード・スミスがケープタウン市の状況を扱うほか、Ｄ・シュレーダーも歴史家Ｇ・Ｍ・シールの叙述を検討し、「ブリティッシュ・ワールド」の理解が深まっている[3)]。

しかし、先行研究にヨーロッパ・アイデンティティの視座は少ない。世紀末ケープのアイデンティティの編成に際して、「ヨーロッパ」は二つの側面で問題となった。第一に、白人間の文化統合においては、単にイギリス系、オランダ系ではなくヨーロッパ系であることが重要な意味を有した。第二に、入植者のアイデンティティにおいては、植民地が本国と異なる側面を持つ、という認識が問題となりはじめた。こうした「旧世界」との距離感の高まりは、ヨーロッパ・アイデンティティがアフリカという異郷において、独自の展開を見せる端緒となっていく。だが、この二側面に対する先行研究の関心は、概して低調である。

以上の諸点をふまえて、本稿は世紀末ケープにおいて、ヨーロッパ・

アイデンティティがどのように展開したか、という問題を検討する。以下、第 1 章では白人間の文化統合、第 2 章では植民地／本国の差異の認識について探っていきたい。

## 第１章　白人間の文化統合と「テュートン人・アイデンティティ」

1910 年の連邦結成まで、今日の南アフリカは複数の地域が分立する状況にあった。その内ケープは、白人開拓者の最初の入植地であり、またイギリス領植民地としても最長の歴史を有した。本稿が対象とする 19 世紀末は、この地域にとって繁栄の時期であったといえる。経済的には 1867 年、植民地北辺のグリカランド・ウェストでダイヤモンドの採掘がはじまって以降、鉱産資源の発見が相次いだ。政治的には、1854 年の代表政府（立法権）授与、1871 年の責任政府（議院内閣制の自治権）授与等、植民地自治の拡大が続いた。こうした状況と連動して、1875 年には 72 万人に過ぎなかった人口も、1891 年には 150 万人、1904 年には 240 万人と急増した[4)]。本章ではこの世紀末ケープについて、白人間の文化統合の問題を検討したい。

ケープの人口構成は他地域と比較して、白人内部の分断が際立つ。全体の約 4 分の 1 の白人は、オランダ系が 6 割、イギリス系が 4 割を占めた。オランダ系は 17 世紀半ば以降ケープに入植してきたが、多くが農村に在住する一方、都市在住者はイギリス化した[5)]。他方、イギリス系は 19 世紀初め以降の入植者であったが、「1820 年の入植者」の失敗以降、多くが都市に在住した[6)]。

このように、都市、農村のラインは両者を分断したが、その関係は必ずしも芳しくなかった。イギリス系は植民地当局、あるいはミッショナリと共同して、オランダ系を圧迫することが多かった。こうした状況は、イギリス系の歴史叙述にも反映する。例えば、J・ノーブル『南アフリカ、過去と現在』（1877 年）は、入植初期のオランダ系について、「…彼らの道徳的状況は、世帯を同じくしていたホッテントット（ケープの先住民）や奴隷ほども高くなかった。…[7)]」と蔑視する。

1870 年代末になると、かかる圧迫、蔑視に対するオランダ系の反発は、アフリカーナのエスニック・アイデンティティに転化する。1875 年結成の真正アフリカーナ同盟は、ケープタウン近郊のパールを拠点と

して、アフリカーンス語とカルヴィニズムの擁護を訴えた。この動きは歴史叙述にも反映する。例えば、先述の『南アフリカ、過去と現在』は、19 世紀前半にケープを出発し、内陸部にトランスヴァール、オレンジ両国を建設したオランダ系の人々を、無知、無法、残酷、野蛮と表象していた[8)]。他方、アフリカーナは同じ人々をフォルトレッカー（先駆者）と称え、「…古のフォルトレッカーは、…もともとわれわれと同じ民族であり、〔イギリスの〕強制がなければわれわれと同じ民族でありつづけるはずであった。…高山と大河によって互いに隔てられていても、全員を一つの民族としてつなぐ紐帯は決して破られない。…[9)]」と記す。こうしたアフリカーナのエスニック・アイデンティティの形成は、1880 － 81 年、イギリス帝国とトランスヴァール、オレンジ両国の間に起こる第一次南アフリカ戦争とも連動していた[10)]。

以上の分断状況を解消し、帝国支配の下に、あるいはイギリス系入植者の世界にアフリカーナを文化的に統合することは、1890 － 96 年、ケープ植民地首相を務めたＣ・Ｊ・ローズにとって重要な課題であった。現地の鉱業利害を代表するローズは、イギリス帝国の南部アフリカ支配の安定化を狙って、ケープを盟主とする南アフリカ連邦の結成を目指した。その第一段階は、ケープの植民地人アイデンティティの形成であった。例えば、ローズは 1891 年、アフリカーナ同盟の年次大会において以下のように演説している。「…この国の若者の考え方を形づくり、訓練し、強化する場所、そうした目的に適う場所は、ケープタウン近郊のほかにありません。ケープ植民地人として、わたしはケープタウンを南アフリカの中心にしたいと思います。…[11)]」更に、植民地自治の重要性を説き、「…もし諸君〔アフリカーナ〕がこの国のイギリス系の人々と誠心誠意協力することを希望するなら、自治の問題についても心を一つにしましょう。…われわれには、振り返ることのできる歴史とネイションがあります。…[12)]」と結語した。こうした背景をふまえて、ローズの庇護の下、数多くの歴史家、作家、建築家等が白人間の文化統合に邁進する[13)]。

かかる文化統合に際しては、人種主義の果たした役割も大きかった。例えば、「植民地修史官」の称号を有した歴史家Ｇ・Ｍ・シールは、南部アフリカの非イギリス系白人の内、ポルトガル人とオランダ人の間に線を引く。「…ポルトガル人は、兵士でも商人でも、南アフリカにお

いて急速に退化する事情にあった。ヨーロッパ人の女性はほとんど見られず、ほぼあらゆる白人男性がバンツー女性と交渉を持った。…野蛮人の社会を除く全ての社会から切り離され、16 世紀の終わりまでしばしば教会の聖職者の活動とも無縁で、怠惰のうちに沈滞し、…その生活は、ヨーロッパ人の生活としてはもっとも惨めになった。…[14]」他方、入植初期のオランダ人に関しては、人種混交を経験したものの、社会秩序と文化的優位の維持に成功した、とする[15]。

こうした人種主義的説明は、イギリス系とオランダ系の関係についても同様であった。例えば、シールは 19 世紀初めのイギリスのケープ支配確定について、以下のように記す。「…征服者と被征服者は同じ人種だったので、ケープ植民地がイギリス軍に降伏したことにより、両派は和解した。全てのヨーロッパ諸国民中、ネーデルラント北部の住民は、イングランドとスコットランドの人々にとってもっとも血縁的に近いのである。…[16]」女性運動家として著名なイギリス系作家 O ・シュライナーも、この種の人種主義的説明を行った。例えば、シュライナーは 1891 年、『ケープ・タイムズ』紙に以下の記事を寄稿している。「…捉えにくいが実際、全ての南アフリカ人をつなぎ、世界の他の人々と区別する紐帯は存在する。この紐帯は人種の混合それ自体である。これが南アフリカ人を世界の他の人々と分け、われわれを一つにしている。…[17]」また、二人はイギリス系とオランダ系をまとめて、「テュートン人」と呼ぶ[18]。このように「テュートン人・アイデンティティ」が強まるケープ植民地の状況は、ドイツとの対立がゲルマン系の出自神話を変えつつあったイギリス本国の状況とは対照的であった[19]。

また以上の、白人を中心とするヨーロッパ・アイデンティティの展開は、人種差別の進展とも軌を一にしていた。近年の研究は、世紀末ケープがこの進展の決定的局面であったことを解明しつつある。植民地経済の拡大は、人口の約 4 分の 3 を占める有色人種の社会的上昇に帰結した。こうした状況に対する白人の不安は、以下の雑誌記事にも確認できる。「…以前は、マレー人〔カラード〕は信頼できる召し使いの階級であった。彼らと白人の主人は親愛の情で結ばれていた。彼らは今日よりずっとつつましく、付き合いやすかった。…マレー人は卑しくとも特別に忠実だと言われたものだ。…〔以前と〕同じもちつもたれつの親密さはもはやない。マレー人は今や、かなり排他的で自立志向である。…[20]」当

時は1894年のグレン・グレイ法等、20世紀のアパルトヘイトに通じる人種差別立法も相次いだ[21)]。

このように世紀末ケープでは、白人間の文化統合に際して、「テュートン人・アイデンティティ」が強まることとなった。また、こうしたヨーロッパ・アイデンティティの展開は、人種差別の進展とも軌を一にしていた。

## 第２章　「ケープからカイロへ」と入植者のアイデンティティ

前章で検討してきた白人間の文化統合と連動しつつ、世紀末ケープの入植者のアイデンティティにおいては、植民地が本国と異なる側面を持つ、という認識も問題となりはじめた。こうした「旧世界」との距離感の高まりは、ヨーロッパ・アイデンティティがアフリカという異郷において、独自の展開を見せる端緒となっていく。かかる入植者のアイデンティティについては、次の議論もふまえる必要がある。「ブリティッシュ・ワールド」に対する関心とあいまって、Ｊ・ダーウィンは近年、19世紀末イギリス帝国の白人定住植民地について、農業ポピュリズムの進展を重視している。この進展は、本国の工業化・都市化批判と共鳴する一方、植民地／本国の差異の認識にも通じていた[22)]。本章ではケープについて、以上の諸点を検討したい。

問題の焦点の一つは、「ケープからカイロへ」にある。イギリス帝国は当時、ケープ植民地を拠点として北へとアフリカ侵略を推し進めた。1885年、植民地に隣接するベチュアナランド（現ボツワナ）が保護領となると、侵略の焦点はより北方のマショナランド（1895年以降ローデシア、現ジンバブエ）に移り、1889年、同地域はイギリス南アフリカ会社領となった[23)]。

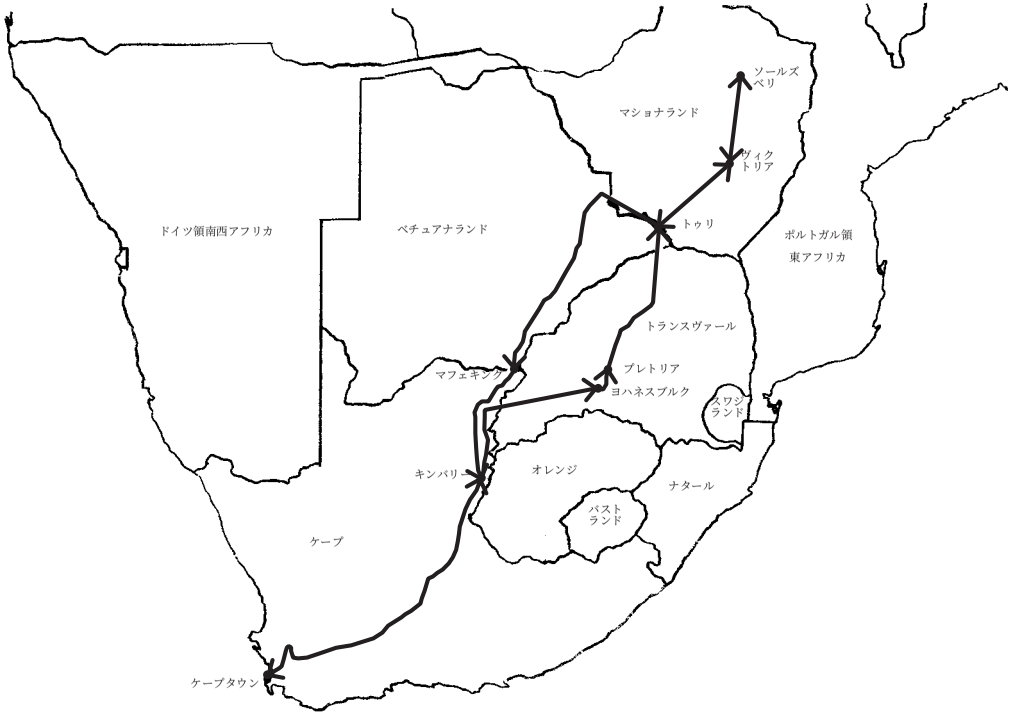
ケープでは早い時期より、指導的立場にある人々が侵略を、「国民的」事業と認識していた。北方、とくにマショナランドに対し、イギリス系は鉱床として、アフリカーナは農産物の市場、あるいは余剰人口の移民先として期待をつないだ[24)]。ローズは1883年、ケープ議会において、「…内陸部の開発は植民地の生来の権利である。…[25)]」と演説し、1889年にはイギリス南アフリカ会社の経営権を掌握している。また、Ａ・ウィルモット＆Ｊ・チェイス『発見から1819年までの喜望峰植民地の歴

**表１　『南アフリカの人、鉱山、動物』の構成**

| 章 | 題　　名 | 『ケープ・アーガス』紙の掲載年月日 |
|---|---|---|
| 1 | 往航 | 1891 年 7 月 8 日 |
| 2 | ケープ植民地 | 1891 年 7 月 20 日 |
| 3 | ダイヤモンド | 1891 年 8 月 3 日 |
| 4 | 金 | 1891 年 8 月 7、10 日 |
| 5 | 鉱業とスポーツ | 1891 年 8 月 31、9 月 1 日 |
| 6 | トランスヴァールのボーア人 | 1891 年 9 月 7 日 |
| 7 | マショナランドへの途上 | 1891 年 9 月 21、28 日 |
| 8 | 探検―構成と装備― | （掲載なし） |
| 9 | ベチュアナランド巡り | 1891 年 10 月 5、12 日 |
| 10 | トレックとハンティング | 1891 年 10 月 19、21 日 |
| 11 | ライオン | 1891 年 10 月 22、26 日 |
| 12 | フェルト旅行の困難 | 1891 年 12 月 11、14 日 |
| 13 | ヴィクトリア・ソールズベリ間の地方の特色 | 1891 年 12 月 18、21 日 |
| 14 | マショナランドのスポーツ | 1891 年 12 月 26、28 日 |
| 15 | マゾエ川の産金地帯 | 1892 年 1 月 2、4 日 |
| 16 | ハイフェルトのアンテロープ狩り | 1892 年 1 月 11 日 |
| 17 | マショナランドの富―疑問と落胆― | 1892 年 1 月 15、18 日 |
| 18 | ソールズベリの生活 | 1892 年 1 月 22 日 |
| 19 | 帰路 | 1892 年 1 月 29、2 月 1 日 |
| 20 | 振り返って | （掲載なし） |

史』（1869 年）は、北方がケープへの「新鮮な刺激」となることを希望し、先述のシールも、ケープの人々こそ新天地の開拓者として最適である、と記す[26]。

以上の背景のもと、植民地／本国の差異の認識は、とくに二つのマショナランド旅行記をめぐって高まる。第一の旅行記の執筆者は、R・S・チャーチル（1849 ― 95 年）である。このW・チャーチルの父親は当時、本国保守党の有力政治家であり、また南部アフリカの鉱山開発に対しても多額の投資を行っていた。こうした経緯もあり、ローズは 1891 年、チャーチルを旅行に招待する。地図は旅行ルートを示す。大まかに言えば、往路は東回り（ケープタウン→キンバリー→ヨハネスブルク→プレトリア→トゥリ）、復路は西回り（トゥリ→マフェキング→キンバリー→ケープタウン）であり、マショナランドではヴィクトリア、ソールズベリを視察した。チャーチルは、本国の『デイリー・グラフィック』紙と旅行記の執筆契約もとり結んでいる。この旅行記は、現地の『ケープ・アーガス』紙が連載したほか、ロンドンの出版社も 1893 年、『南アフリカの人、鉱山、動物』[27] として刊行した（表 1 は本の構成と新




**R.S.チャーチルの旅行ルート**

聞の掲載年月日との対応関係を示す）。

チャーチルの旅行記は、オランダ系に対する蔑視を第一の特徴とする。例えば、トランスヴァールのボーア人農場主については以下のように記す。「…そのボーア人農場主は、無益な怠惰そのものであった。…彼は完全に無教養であり、聖書のあらゆる言葉を当に狂信的に信じるほかは、本も開かず、新聞を読むことさえ決してなかった。…[28]」ここに確認できるのは、イギリス人の伝統的侮蔑感であるといえよう。

マショナランドに対しても否定的評価を下す。例えば、農業については以下のように記す。「…よく言われるすばらしい国マショナというのはどこにあるのか、とわたしは自問しはじめた。ボーア人が渇望する『約束の地』はどこにあるのか、と。土壌が異常に肥沃な低地では、熱病や馬の病気が人間を苦しめ、家畜を根絶する。こうした害悪が広くは流行していない高地の土壌は、不毛かつ無価値である。…わたしは、繁栄したヨーロッパ人の入植に相応しい場所を見たことがない。ある種の人間、つまりスポーツマンやハンターといった人間にとってのみ、この国は魅力的なのであろう。…[29]」鉱業についても手厳しい。「…マショナランドは、今日知られている限りでは、アルカディアでもエル・ドラドでもない。マゾエ川の産金地帯が落胆すべきものであり、いかなる富もそこから期待できない、ということがわかっても、そのことは比較的冷静に受けとめられている。というのも、この国にしばらく住んでいる人も最近来た人も皆、ハートレイ・ヒル地方の鉱産資源がマゾエの欠を補って余りあることを確信しているからである。かくも大量の、明らかに具体的な報告や噂が全く無価値かつ誤りであるとわかる事態は、ありえないように思われる。しかし、わたしは即座に、これがそうした事態であると理解した。…[30]」また、先住民に対する蔑視も確認できる。「…マショナ人が労働者としても使用人としても全く無価値である、ということに関してはあらゆる意見が一致している。彼らが 2 週間以上他の人といっしょにいることはめったになく、毛布や衣服が与えらなければほぼいつでも逃げ出す。…[31]」こうした叙述をふまえて、結論は以下のようになる。「…多くの、さまざまの有能な権威筋が抱いてきた、マショナランドの多大な鉱産、農業資源に関する希望的観測が、いまのところ正当化されないことは否定できまい。…[32]」マショナランドは当時、大雨とマラリアの被害に遭ったばかりであり、投資家と入植者は一時的

に失望感を深めていた[33]。しかし、以上の叙述はこの種の失望感に加えて、植民地に対する本国人の蔑視にも基づいていた。

こうした旅行記の内容に対して、ケープでは反発の声が上がった。例えば、『ケープ・アーガス』紙（1892年3月1日付）は、以下のように批判している。「…南アフリカのイギリス自治領の将来は、マショナランドのイギリス南アフリカ会社の事業発展と不可分の関係にある。ランドルフ卿はその将来を、トランスヴァールのボーア人に手渡してしまった。…彼の手紙〔旅行記〕はマショナランドについて、ほとんど真実を述べようともしていない。…[34]」この批判は、「トランスヴァールのボーア人」に対するライヴァル意識を鮮明にしているが、他方には、旅行記の農場主蔑視に対する『ケープ・タイムズ』紙（1891年9月1日付）の反発も存在したことに留意したい[35]。

J・P・フィッツパトリック（1862－1931年）のもう一つの旅行記が登場するのは、一連の反発と連動してのことである。フィッツパトリックは1890年代半ば以降、アイトランデル（トランスヴァールのイギリス系入植者）の政治指導者として活躍し、1907年には南アフリカ連邦の「国民的」児童文学『ブッシュフェルトのジョック』を執筆する。しかし、もともとはケープのキングウィリアムズタウン出身であり、この時期、金鉱会社に就職してローズの知己を得た。その縁で、ローズはフィッツパトリックに、チャーチルのマショナランド旅行に同道し鉱山を案内するよう命じる。フィッツパトリックの旅行記は、チャーチルと同じ『ケープ・アーガス』紙が連載し、同新聞社が1892年、『つるはしとペンを持ってマショナランド巡り』[36]として刊行した（表2は本の構成と新聞の掲載年月日、署名年月日との対応関係を示す）。

フィッツパトリックはまず、チャーチルのボーア人蔑視に反発を示す。例えば、以下のエピソードを引く。「…ピーターズブルクにいたとき、ランドルフ卿〔チャーチル〕はボーア人の農場を見てみたい、と言い出した。…年老いたボーア人はいなかったので、…その妻が『イギリス貴族』を歓迎しに出てきた。…おそらく、老婦人の格好が彼の理想に合わなかったのだろう。…『何て醜い！行くぞ、行くぞ！馬車を出せ』と卿は叫んだ。…もちろん、ここは半分文明、半分未開の国に過ぎないし、人々も高貴な伝統など全く知らない。しかしわれわれは、いささか偏見を持っているカフィール（先住民）の女性に対してでも、あのような扱

**表２　『つるはしとペンを持ってマショナランド巡り』の構成**

| 章 | 題　　名 | 『ケープ・アーガス』紙の掲載年月日 | 署名年月日 |
|---|---|---|---|
| 1 | トゥリへ旅立つ | 1891 年 8 月 25 日 | 1891 年 7 月 15 日 |
| 2 | ランドルフ卿は急いで | 1891 年 9 月 2 日 | 1891 年 7 月 27 日 |
| 3 | 路傍の墓 | 1891 年 12 月 31 日 | 1891 年 8 月 5 日 |
| 4 | ジンバブエを訪ねて | 1892 年 1 月 8 日 | 1891 年 8 月 15 日 |
| 5 | ローズとロ・ベン | 1892 年 2 月 1 日 | 1891 年 8 月 30 日 |
| 6 | 旧き金鉱 | 1892 年 2 月 5 日 | 1891 年 9 月 1 日 |
| 7 | ソールズベリにて | 1892 年 2 月 12 日 | 1891 年 10 月 1 日 |
| 8 | 働く探鉱者 | 1892 年 2 月 19 日 | 1891 年 11 月 1 日 |
| 9 | ライオンと他のこと | 1892 年 3 月 7 日 | （署名なし） |
| 10 | トウダイグサ | 1892 年 3 月 8 日 | （署名なし） |
| 11 | タティ居留地 | 1892 年 3 月 31 日 | 1891 年 11 月 1 日 |
| 12 | カーマの国を通って故郷へ | （掲載なし） | 1891 年 11 月 1 日 |

い方はしないものだ。… [37]」このエピソードに関して、チャーチル自身は何も書き残していない。

マショナランドに対しても、チャーチルとは対照的に肯定的評価が支配的である。例えば、先住民については以下のように記す。「…マショナ人は田園生活の、交易を生業とする民である。…彼らは知的で、平和を愛し、勤勉な人種であるように思える。… [38]」鉱業についても開拓者精神を称揚する。「…当地の人々といっしょにいて非常に強く印象に残るのは、まず鉱業に従事する開拓者の若々しさ、次いで金を産み出す国の領域の広大さ、そして、経験が浅い人が少人数しかいなかったにもかかわらず、発見された鉱山の多さである。… [39]」こうした叙述をふまえて、結論は以下のようになる。「…未熟かつ無教育の野蛮人の手によっても大量良質の穀類、コメ、タバコ…を産み出しうる土地は、知識と情熱のある人の手があれば大いに発展するに違いない。ここは自然の庭園にして穀倉である。… [40]」

以上のマショナランド礼賛は、開拓者精神の称揚を含めて、ダーウィンの言う農業ポピュリズムに近い。『つるはしとペンを持ってマショナランド巡り』は、好意的書評を得た [41]。フィッツパトリック自身、この旅行記以降長く、同様の北方叙述を行っていく [42]。また、農業ポピュリズムの表象は、多くが農村の住民であったアフリカーナも共有することとなった。例えば 1892 年、あるオランダ語新聞は、「ケープからカイロへ」を成し遂げつつあるローズを称賛し、「…彼〔ローズ〕は、ダヴィデ王の

ように淡紅色の、清々しい容貌の青年である。その周りには旧きイングランド南部の田園の、森や荒れ地や生け垣の雰囲気が漂っている。…[43]」と記す。アフリカーナが好む旧約聖書の世界と、本国の工業化・都市化批判が理想化する「イングランド南部の田園」とが並存する。更に、こうした表象は、本国に対するケープの矜持ともなった。例えば1897年、アフリカーナ同盟の植民地議会下院議員であるＭ・Ｍ・ヴェンターは、本国議会で北方を「田園と農業の国」と称える[44]。

チャーチルの旅行記に対する反発、フィッツパトリックの旅行記、あるいは農業ポピュリズムが示すのは、植民地が本国と異なる側面を持つ、という認識、あるいは「旧世界」との距離感の高まりである。この高まりは、ヨーロッパ・アイデンティティがアフリカという異郷において、独自の展開を見せる端緒となっていく。

## おわりに

世紀末ケープにおいて、ヨーロッパ・アイデンティティの展開には二つの側面が存在した。第一の側面は、植民地内の問題である。当時、ローズが推し進めた白人間の文化統合は、イギリス系とオランダ系の年来の分断状況を解消に向かわせた。そこでは、単にイギリス系、オランダ系ではなくヨーロッパ系であることが重要な意味を有し、「テュートン人・アイデンティティ」が強まることとなった。他方、第二の側面は植民地／本国間の問題である。両者の差異の認識は、とくに「ケープからカイロへ」をめぐって高まり、そこでは農業ポピュリズムが一定の役割を果たした。こうした諸側面は全体として、ヨーロッパ・アイデンティティの（南部）アフリカ独自の展開を促していく。

おわりに、いくつかの問題を整理したい。まず、白人を中心とするヨーロッパ・アイデンティティの展開が、人種差別の進展と軌を一にしていたことについてである。この事態に対する有色人種側の反応は複雑であった。反発は当然存在したが、他方にはイギリス帝国支配への文化統合を望む者もいた[45]。また、「西洋中心主義的歴史叙述」の打開については、以上の植民地の状況がイギリス本国、あるいはヨーロッパのアイデンティティにどう影響したか、という問題を探ることが重要である。西洋／非西洋世界の固定的把握もまた、こうしたテーマの探究を通して

はじめて克服可能となるに違いない[46]。しかし、かかる諸問題の本格的検討は、他日を期したい。

注

1）A. Lester, 'Introduction: Historical Geographies of Southern Africa', *Journal of Southern African Studies* 29-3 (2003). ラディカル（ネオ・マルクス）派のアパルトヘイト理解とウォーラーステインとの関係については、拙稿「アパルトヘイトとウォーラーステイン」川北稔編『ウォーラーステイン』講談社、2001 年。

2）C. Bridge and K. Fedorowich, 'Mapping the British World', *Journal of Imperial and Commonwealth History* 31-2 (2003).

3）V. Bickford-Smith, *Ethnic Pride and Racial Prejudice in Victorian Cape Town: Group Identity and Social Practice, 1875-1902*, Cambridge, 1995; D. Schreuder, 'The Imperial Historian as Colonial Nationalist: George McCall Theal and the Making of South African History', in: G. Martel (ed.), *Studies in British Imperial History: Essays in Honour of A.P. Thornton*, London, 1986. 先述の特集「ブリティッシュ・ワールド」にも以下の論説がある。V. Bickford-Smith, 'Revisiting Anglicisation in the Nineteenth-Century Cape Colony', *Journal of Imperial and Commonwealth History* 31-2 (2003). 以下も参照。M. Tamarkin, *Cecil Rhodes and the Cape Afrikaners: The Imperial Colossus and the Colonial Parish Pump*, London, 1996; A. Thompson, 'The Language of Loyalism in Southern Africa, c. 1870-1939', *English Historical Review* 118-477 (2003). 世紀末ケープの状況は、現在の南アフリカ共和国の起源である 20 世紀前半の連邦に大きく影響することとなった。拙稿「南アフリカ連邦結成と『和解』の創出」『史林』85 巻 3 号（2002 年）。連邦の問題については、S. Dubow, 'Colonial Nationalism: The Milner Kindergarten and the Rise of South Africanism, 1902-1910', *History Workshop Journal* 43 (1997); J. Lambert, 'South African British? or Dominion South Africans?: The Evolution of an Identity in the 1910s and 1920s', *South African Historical Journal* 43 (2000). 先述の特集「空間、場所、アイデンティティ」にも以下の論説がある。J. Foster, '"Land of Contrasts" or "Home We Have Always Known"?: The SAR&H and the Imaginary Geography of White South African Nationhood, 1910-1930', *Journal of Southern African Studies* 29-3 (2003).

4）Bickford-Smith, *Ethnic Pride and Racial Prejudice*, p.11.

5）H. Giliomee, 'The Beginnings of Afrikaner Ethnic Consciousness, 1850-1915', in: L. Vail (ed.), *The Creation of Tribalism in Southern Africa*,

Berkeley, 1989, pp.22-27.

6）N.G. Garson, 'English-Speaking South Africans and the British Connection: 1820-1961', in: A. De Villiers (ed.), *English-Speaking South Africa Today*, Cape Town, 1976, p.18.

7）J. Noble, *South Africa, Past and Present: A Short History of the European Settlements at the Cape*, London, 1877, p.15.

8）*Ibid.*, pp.169, 173.

9）*Zuid Afrikaan*, 13 January, 1881.

10）T.R.H. Davenport, *The Afrikaner Bond: The History of a South African Political Party, 1880-1911*, Oxford, 1966, pp.40-42.

11）Rhodes' Speech at the Annual Congress of the Afrikander Bond, 30 March, 1891, in: Vindex (ed.), *Cecil Rhodes: His Political Life and Speeches 1881-1900*, London, 1900, p.276.

12）*Ibid.*, p.277.

13）拙稿「『和解』の創出」、12 頁。

14）G.M. Theal, *History of South Africa vol.2*, London, 1893, pp.238-239.

15）*Ibid. vol.5.*, p.205.

16）Id., *South Africa*, London, 1894, p.112.

17）O. Schreiner, *Thoughts on South Africa*, London, 1923, p.61.

18）例えば、Theal, *South Africa*, p.52; O. Schreiner, *Closer Union: A Letter on the South African Union and the Principles of Government*, London, 1909, p.42.

19）イギリス本国の状況について、例えば邦語では、南川高志『海のかなたのローマ帝国―古代ローマとブリテン島―』岩波書店、2003 年、33 － 36 頁。

20）P.N. Waggett, 'The Malays of Cape Town', *Cowley Evangelist* (August, 1899), in: Bickford-Smith, *Ethnic Pride and Racial Prejudice*, p.72.

21）グレン・グレイ法については、松野妙子「アパルトヘイトの成立」『シリーズ世界史への問い九 世界の構造化』岩波書店、1991 年、228 － 231 頁。

22）J. Darwin, 'Civility and Empire', in: P. Burke, B. Harrison and P. Slack (eds.), *Civil Histories: Essays Presented to Sir Keith Thomas*, Oxford, 2000, pp.326-334.

23）ケープ史に対する関心は概して低調であるとはいえ、「ケープからカイロへ」に関しては、数多くの先行研究が存在する。社会経済的側面については例えば、R. Robinson and J. Gallagher, *Africa and the Victorians: The Official Mind of Imperialism*, London, 1961, pp.210-253; J.S. Galbraith, *Crown and Charter: The Early Years of the British South Africa Company*, Berkeley, 1974; I. Phimister, *An Economic and Social*

*History of Zimbabwe 1890-1948: Capital Accumulation and Class Struggle*, London, 1988, pp.4-44. 邦語では、北川勝彦『南部アフリカ社会経済史研究』関西大学出版部、2001 年、185 － 208 頁。文化的側面についても、多様なテーマが注目を集めてきた。例えば、「黄金の国ジンバブエ」の表象は、ドイツ人探検家 K ・マウフが 1871 年に遺跡を「発見」し、作家 H ・ R ・ハガードが 1885 年に『ソロモン王の洞窟』を出版したことによって生成し、侵略の重要な要因となった。こうした問題については、D. Tangri, 'Popular Fiction and the Zimbabwe Controversy', *History in Africa* 17 (1990). 邦語では、吉國恒雄『グレート・ジンバブウェ―東南アフリカの歴史世界―』講談社、1999 年、92 － 100 頁。F ・ C ・セラスのハンティングの問題については、J.M. MacKenzie, *The Empire of Nature: Hunting, Conservation and British Imperialism*, Manchester, 1988, pp.120-146. T ・ベインズの地図の問題については、L. Stiebel, 'A Map to Treasure: The Literary Significance of Thomas Baines's Map of the Gold Fields of South Eastern Africa (1873)', *South African Historical Journal* 39 (1998).

24）Phimister, *Economic and Social History*, pp.5-7; Tamarkin, *Cecil Rhodes*, pp.107-127.

25）Rhodes' Speech at the Cape House, 18 July, 1883, in: Vindex, *Cecil Rhodes*, p.51.

26）A. Wilmot and J. Chase, *History of the Colony of the Cape of Good Hope from Its Discovery to the Year 1819*, Cape Town, 1869, p.530; Theal, *South Africa*, p.387.

27）R.S. Churchill, *Men, Mines and Animals in South Africa*, London, 1893.

28）*Cape Argus*, 7 September, 1891; Churchill, *Men, Mines and Animals*, p.94.

29）*Cape Argus*, 18 December, 1891; Churchill, *Men, Mines and Animals*, pp.198-199.

30）*Cape Argus*, 18 January, 1892; Churchill, *Men, Mines and Animals*, pp.269-270.

31）*Cape Argus*, 11 January, 1892; Churchill, *Men, Mines and Animals*, p.248.

32）*Cape Argus*, 22 January, 1892; Churchill, *Men, Mines and Animals*, p.276.

33）Phimister, *Economic and Social History*, pp.7-8.

34）*Cape Argus*, 1 March, 1892.

35）*Cape Times*, 1 September, 1891.

36）J.P. FitzPatrick, *Through Mashonaland with Pick and Pen*, Johannesburg, 1892.

37）*Cape Argus*, 2 September, 1891; FitzPatrick, *Through Mashonaland*, p.38. しかし他方では、「トランスヴァールのボーア人」に対するライヴァル意識も鮮明にする。例えば、ボーア人の一部は 1890 年、ケープに対抗して北方のバニュアイランドに移民を企て、失敗した（バニュアイランド・トレック）。Davenport, *Afrikaner Bond*, pp.134-138. この帰還者については、以下のように皮肉を込めて記す。「…ピーターズブルクで、われわれはトレック―あの偉大なバニュアイランド・トレックについて多くの話を聞いた。トレックは泡と消えた―今年を以って、全く消えたのだ。…リンポポ川の土手でわれわれが目にしたのは、平和裏に、愛想をつかして戻ってきて、ぶらぶらしてばか呼ばわりされているかつての侵入者の一団である。…」*Cape Argus*, 25 August, 1891; FitzPatrick, *Through Mashonaland*, p.29.

38）*Cape Argus*, 2 September, 1891; FitzPatrick, *Through Mashonaland*, p.45.

39）*Cape Argus*, 7 March, 1892; FitzPatrick, *Through Mashonaland*, p.61.

40）*Ibid.*, p.126.

41）「…この小さな本を、『アーガス』紙の読者に紹介する必要はあるまい。そのタイトルを見ればすぐに、活き活きとした、そしてしばしばユーモラスな文体で、マショナランドでの著者の経験を語った新聞書簡のことを思い出すだろう。書簡はトレックのあいまに、ひざの上に本を載せて書かれたが、〔そのために〕いくらか増補され、またわずかに書き直されている。そして疑いなく多くの読者は、その集成をもつことに喜びを感じるだろう。…」*Cape Argus*, 24 February, 1892.

42）例えば 1909 年、南アフリカ連邦結成運動の機関誌『ステイト』誌には、以下の記事を寄稿している。「…開拓者とは誰か？デビルズ・ピーク〔ケープタウン近郊〕の山肩の、古いブロック・ハウスを再度見上げよう！彼らはそこから始まった。その真下にはローズの記念碑があり、2000 マイル北方には彼の遺骸が眠っている。さらに 1000 マイル北方では、開拓者はいまなお進出を続けている。そして、西へ東へ 1 マイルごとに、男も女もオランダ人もイギリス人も含めて開拓者、つまりわれわれの国を創ったわれわれの仲間がいるのだ。…」P. FitzPatrick, ‘Jock of the Bushveld and Those Who Knew Him’, *The State* 1-1 (1909), p.35. 『ステイト』誌については、拙稿「『和解』の創出」、19 － 30 頁。

43）*Onze Courant*, 25 July, 1892, in: Tamarkin, *Cecil Rhodes*, p.214.

44）*British Parliamentary Papers*, 1897, [311.] vol.IX, : ‘Second Report from the Select Committee Appointed to Inquire into the Origin and

Circumstances of the Incursion into the South African Republic by an Armed Force, and into the Administration of the British South Africa Company, &c.; With the Proceedings, Evidence, Appendix, and Index', p.129.

45）20 世紀のケープ・カラードについては例えば、M. Adhikari, '"The Product of Civilization in Its Most Repellent Manifestation": Ambiguities in the Racial Perceptions of the *APO* (*African Political Organization*), 1909-23', *Journal of African History* 38 (1997).

46）19 世紀前半のケープについては例えば、A. Lester, *Imperial Networks: Creating Identities in Nineteenth-Century South Africa and Britain*, London, 2001.

（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）